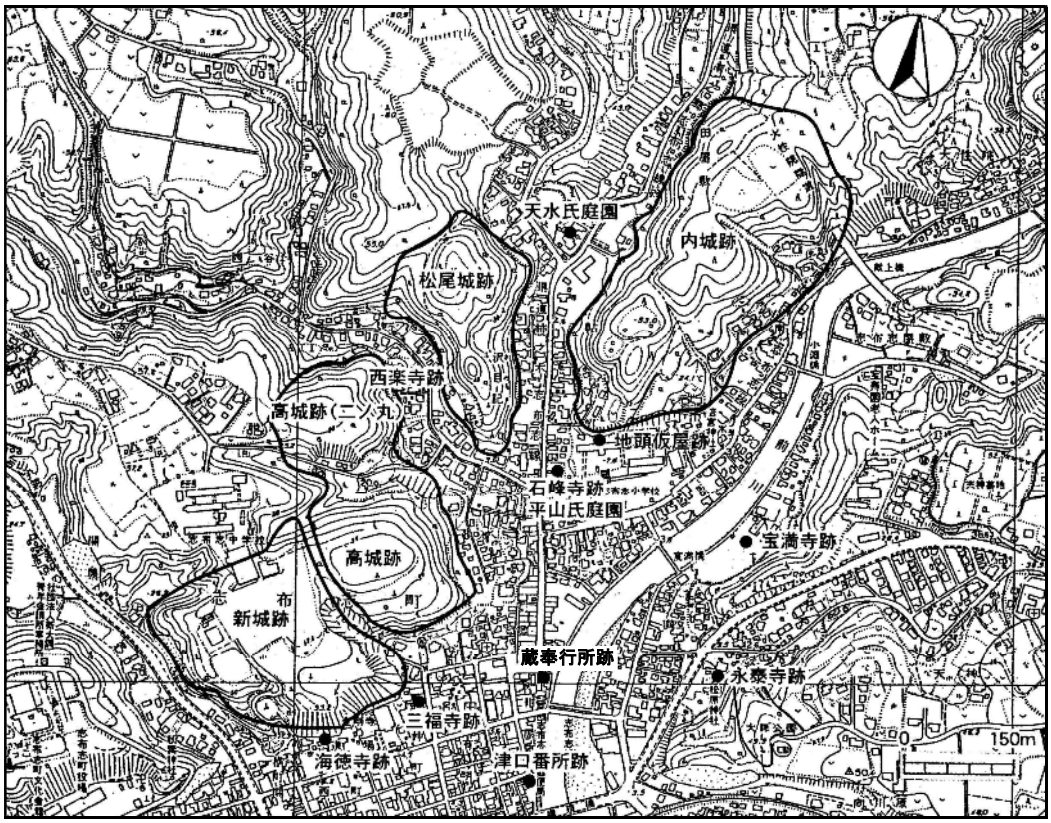
国指定史跡「志布志城跡」

志布志市教育委員会 2014.4.1改訂

志布志湾に面した前川(まえがわ)の河口付近、シラス台地の先端に内城(うちじょう)・松尾城(まつおじょう)・高城(たかじょう)・新城(しんじょう)の４つの中世山城がある。この４城をあわせて「志布志城」と呼んでいる。

志布志は、万寿３年(1026年)に都城を中心として平季基(たいらのすえもと)によって開かれた、日向国の大荘園島津荘(しまづのしょう)の港として発達した。平安時代末期の文治５年(1189年)には救仁院(くにいん)氏が治め、救仁院氏の分家にあたる安楽(あんらく)氏が志布志の西部にある安楽の地と安楽城を治めていた。その後、救仁郷(くにごう)氏、千種(ちぐさ)氏の領有を経て、志布志城の城主として記録に残る楡井(にれい)氏が登場する。

志布志城の築城者と築城年代は正確には不明だが、建武３年(1336年)に志布志城の肝付氏が重久氏に攻められたという記録が残されている。この記録にある「志布志城」は最も早く築城されたとされている松尾城を指すと考えられている。先に述べたように、港の領有をめぐって志布志城の領主は幾度も交代しており、記録上に見える領主を大きく分けると、楡井(にれい)氏－新納(にいろ)氏－豊州家(ほうしゅうけ)島津(しまづ)氏－肝付(きもつき)氏－島津氏の流れとなる。



志布志城の４城と周辺史跡等

１）楡井氏と畠山氏の時期（1338？～1357年）

楡井頼仲を中心とした楡井氏は、信濃(現在の長野県)に本流を持つ一族で、南朝方に属して松尾城を拠点とし、同じく南朝方の肝付氏と協力関係を保ちながら、北朝方の島津氏や畠山氏と対立した。江戸末期の『志布志記』によると、暦応年間(1338～1342年)以来、松尾城で勢力を有していたようである。興国元年(1340年)には、同じ信濃出身の玉山玄提和尚を招いて大慈寺を創建している。

正平６年(1351年)３月、楡井氏と畠山氏は大規模な戦いを開始し、８月には志布志城が陥落している。敗れた楡井頼仲は同じ南朝方の肝付氏を頼って高山に落ちのび、肝付氏の許しを得て弓張城に居を構えた。その間、畠山氏が松尾城を領有したようである。

その後、正平12年(1357年)までに数回挙兵して松尾城や大崎胡麻ヶ崎城を奪うなどしたが、最後には敗れて大慈寺宝池庵で自刃したと伝えられている。頼仲の位牌と墓は、大慈寺宝池庵跡である現在の大慈寺にある。また、弓張城跡である高山の四十九所神社には、頼仲の誠忠碑が建てられている。

２）新納氏の時期（1357～1538年）

新納氏は島津氏の分家にあたり、島津４代忠宗の四男時久が日向新納院の地頭となり新納氏を名乗ったことに始まる。畠山氏に新納院を奪われ、救仁院を与えられるが、当時は楡井氏が志布志城を領有していた。

楡井氏が畠山氏に敗れた後、新納氏の２代実久が志布志を領有し、島津６代(奥州家)氏久の援護を受けて畠山氏を撃退した。これ以降、新納氏は志布志を本拠として約180年の長期に渡り志布志を治めている。

氏久は東福寺城・大姶良城・志布志城を居城としており、新納氏に志布志城を任せていたが、貞治４年(1365年)頃になると志布志城を居城とし、日向・大隅での勢力拡大に注力していく。

正平18年(1363年)、島津５代貞久は、薩摩を三男師久に、大隅を四男氏久に譲り、分割して治めることとした。ふたつの島津家は、師久が上総介を名乗ったことから総州家、氏久が陸奥守を名乗ったことから奥州家と呼ばれる。総州家と奥州家は、当初は協力していたものの次第に争うようになり、応永８年(1401年)、奥州家島津氏久と総州家島津伊久との間で争いがおこり、伊久方の本田氏が串間より志布志城を攻めた。この時、志布志の新納実久が都城に遠征していたため城内は手薄だったが、住民が応戦し、実久が兵を戻すまで防ぎき

ったとされている。この戦いは犬の馬場合戦と呼ばれ、戦死した熊田原兄弟を模して造ったと伝えられる仁王像が宝満寺跡に残されている。

長禄２年(1458年)、島津９代忠国が日向の伊東氏への備えとして、志布志の新納忠続に飫肥城を与えて守らせたため、志布志城は弟の是久と忠明が守ることとなった。また、島津10代立久は更なる備えとして、飫肥城と志布志城の中間にある櫛間城(宮崎県串間市)を伊作家島津久逸に守らせた。その後、新納氏が久逸を伊作へ戻すよう島津11代忠昌に願い出て了承されるが、久逸はこれに反発して文明16年(1484年)に反乱をおこし、日向の伊東氏や豊後の大友氏と通じて飫肥の新納忠続を攻撃した。この時、志布志にいた新納忠続の弟のうち忠明は兄に味方したが、是久は娘の義父であった久逸についたため、志布志の将兵は敵味方に分かれて戦うこととなった。敗れた久逸が降伏した結果、島津11代忠昌は久逸を串間から伊作に帰し、新納忠続は飫肥から志布志に戻され、末吉・財部・救仁郷を新たに与えられた。串間と飫肥は戦功のあった豊州家島津氏に与えられている。

その後、新納氏は飫肥の豊州家島津氏や都城の北郷氏、日向の伊東氏との対立の中で、時に島津本家にも反発して領土を拡大し、新納９代忠茂の頃、天文４年(1535年)には、北は財部・梅北、西は福山・垂水、南は大崎までを領有していた。

この頃、薩州家島津実久は島津14代勝久を圧迫し、弱体化した本家に代わり島津氏を掌握しようとしたため、14代勝久は伊作家の島津忠良に助勢を求め、その子である島津貴久を養子とし15代を継がせた。これに反発した薩州家島津実久は忠良・貴久親子を相手に反乱を起こした。

天文４年(1535年)、薩州家島津実久に呼応して、飫肥の豊州家島津忠朝、都城の北郷忠相、清水(国分)の本田董親、高山の肝付兼続、根占の禰寝氏らが志布志に集まったが、志布志の新納忠茂は応じなかった。そのため、天文５年(1536年)以降、飫肥の豊州家島津氏、都城の北郷氏、高山の肝付氏らが三方より志布志を攻め、天文８年(1538年)に新納氏は降伏し、豊州家島津氏に志布志城を明け渡し、志布志を去った。これにより志布志を含む救仁院は豊州家島津氏が領有し、救仁郷は肝付氏が領有することとなった。

３）豊州家島津氏の時期（1538～1562年）

豊州家は島津氏の分家のひとつで、島津８代久豊の三子季久を祖とし、季久

が豊後守を称したことから、豊州家と呼ばれる。

救仁院を手に入れた豊州家島津忠朝は飫肥を息子に任せ、志布志城に移った。その後、薩州家方であった肝付氏が本家方(伊作家方)となり、救仁院に侵攻するようになり、永禄元年(1558年)には志布志も肝付氏から攻められている。

永録５年(1562年)、豊州家島津忠親は、伊東氏に攻められた飫肥城が落城し、志布志も肝付氏に攻められ和睦を申し出て、飫肥を伊東氏に、救仁院を肝付氏に明け渡し、豊州家島津氏は串間に退いた。

４）肝付氏の時期（1562～1576 年）

当初、志布志城には肝付兼続の嫡男良兼が入り、永禄７年(1564年)に肝付兼続が重臣とともに移った。

豊州家島津氏は永禄５年(1562年)末に飫肥城を奪還したものの、永禄10年(1567年)には再び伊東氏に攻められた。これに応じて肝付氏は串間を攻めて豊州家を降伏させ、串間を明け渡させた。この結果、豊州島津氏は飫肥も伊東氏に明け渡し、都城へ退いた。

肝付兼続は永禄９年(1566年)に志布志で亡くなり、位牌は現在も大慈寺に残されているが、墓の所在は不明である。江戸中期に子孫が建てた追善塔が志布志町内の小西に存在し、市指定史跡(指定名：肝付兼続の墓)となっている。

天正２年(1574年)、島津氏に攻められた肝付氏方の牛根城が落城。この時、伊東氏の援軍が志布志の内城に立寄った後、根占を攻めている。鹿児島県歴史資料センター黎明館、志布志埋蔵文化財センターに展示されている内城跡の模型は、この時の内城の様子を想定して復元されている。

天正３年(1575年)、島津氏との戦いが不利となった肝付氏は、島津氏に下り伊東氏と絶縁する。その年末、伊東氏に新納院高城を奪われ、串間と志布志も攻められた。翌、天正４年(1576年)、肝付氏は島津氏の伊東領高城攻めに参加し、南郷の戦いで壊滅的大敗を喫して串間に退く。その後、肝付氏の所領は高山を除いて島津氏の所領となり、肝付氏は高山に移った。

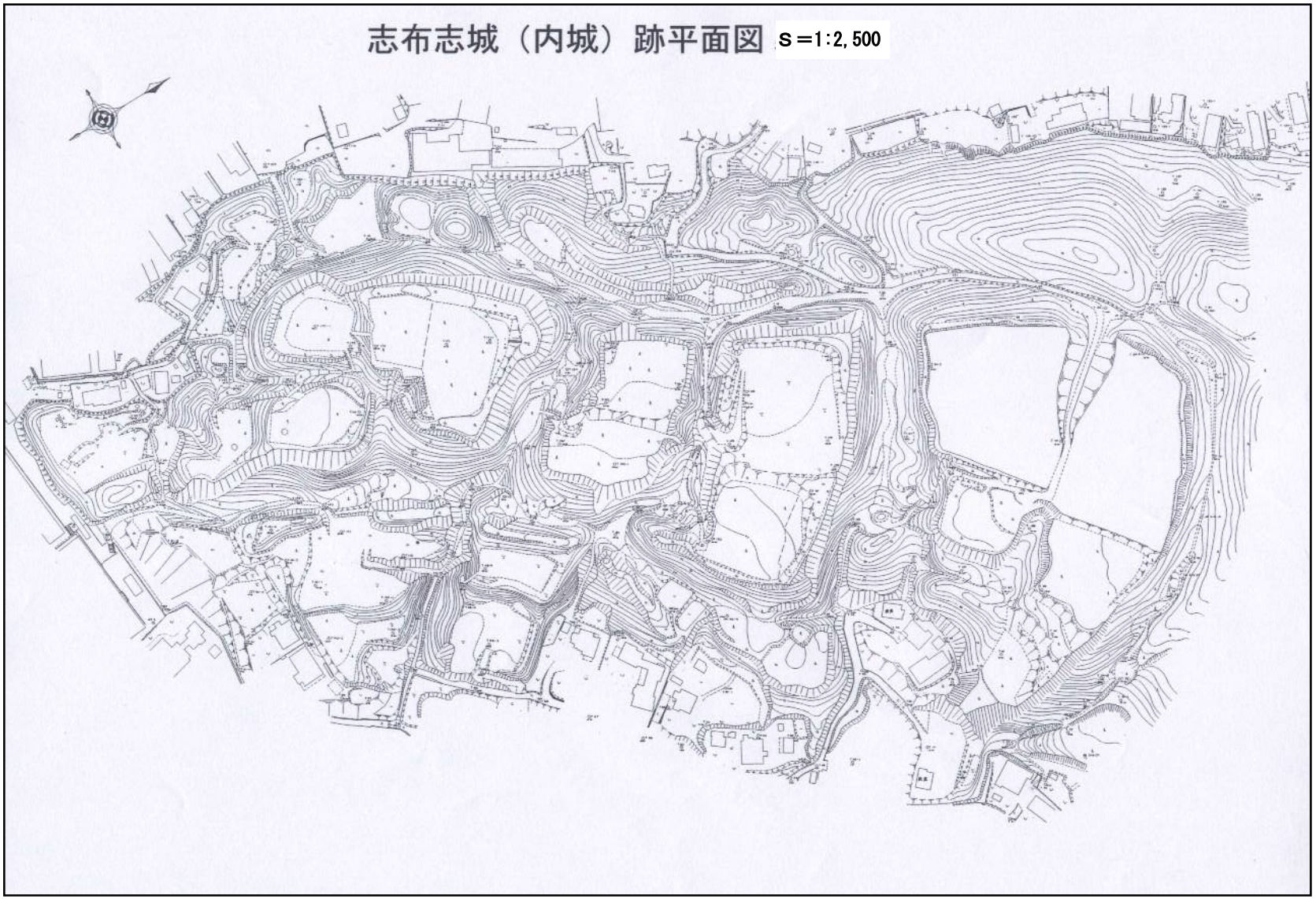
５）島津氏の時期（1577 年～）

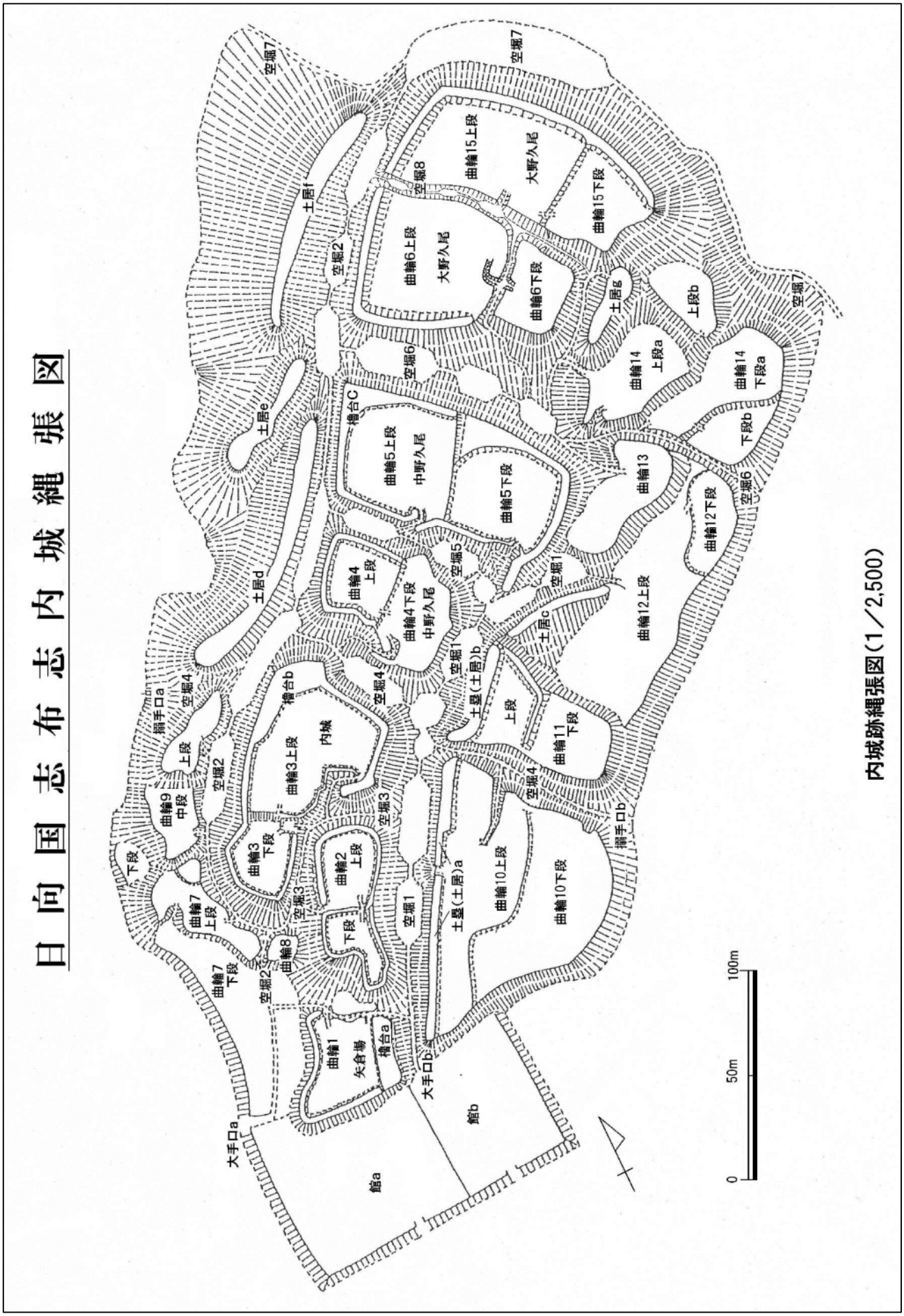
天正５年(1577 年)、島津氏の地頭として鎌田政近が志布志に入る。同年、島津義弘が伊東氏の都於郡城を攻略、伊東氏は豊後へ逃れる。この頃より日向南部は島津氏が平定し、志布志城は最前線の城という性格を失ったと考えられる。

年　　代	内　　容
文治５年(1189)	安楽平九郎為成に代わり、救仁院平八成直が救仁院地頭弁済使となる
建久２年(1191)	救仁院平八成直、地頭弁済使職を解任される
建久８年(1197)	建久図田帳に　島津荘寄郡救仁院90町　地頭右兵衛忠久　とある
文永８年(1271)	この頃、救仁院地頭方沙汰人は図師馬入道道西
正和５年(1316)	救仁院地頭沙弥蓮正、宝満寺に志布志の地を寄進
元弘元年(1331)	日向方惣地頭北条守時、救仁院・救仁郷の地頭代官救仁郷資清、宝満寺に土地屋敷を寄進
建武元年(1334)	この頃、救仁郷・救仁院地方は千種忠顕の所領か
建武３年(1336)	重久篤兼、志布志城の肝付兼重を攻め落とす
興国元年(1340)	楡井頼仲、大慈寺を創建
正平３年(1348)	楡井頼仲、松尾城で挙兵
正平６年(1351)	畠山直顕、楡井頼仲の松尾城を攻め落とす
	直顕、田浦条と岩広名を大慈寺に寄進
正平12年(1357)	楡井頼仲、挙兵するも松尾城陥落し、頼仲は自刃する
	新納実久、松尾城に入る。内城の畠山直顕、実久を攻めるが、島津氏久が実久を助け、直顕は櫛間に退く
正平13年(1358)	菊池武光、志布志に侵攻し大慈寺に禁札を出す
正平16年(1361)	島津氏久、大慈寺に岩広名半分を寄進
正平20年(1365)	この頃、氏久は志布志に居を定める
天授３年(1377)	氏久、内城より出陣し、都城に今川了俊を破る
応永８年(1401)	櫛間の本田忠親、志布志城を攻め、熊田原兄弟討死(犬之馬場合戦)
応永11年(1404)	島津元久、日向、大隅の守護職となる
応永16年(1409)	島津元久、薩摩の守護職となる(以降、島津氏が三州の守護職を歴任)
文明６年(1474)	この頃、志布志に新納是久及び忠明、肝付に肝付兼忠、救仁郷に肝主税助、櫛間に伊作久逸及び又四郎
天文４年(1535)	新納氏は志布志に居城し、梅北・財部・市成・垂水・牛根等を領有
天文５年(1536)	豊州島津氏忠朝、志布志城を攻める
天文７年(1538)	新納氏敗れ、新納忠茂は佐土原へ去る。島津忠朝が志布志城に入る
永禄元年(1558)	肝付兼続、肝付竹友に志布志を攻めさせ、島津方伊藤源四郎と向川原にて戦う
永禄５年(1562)	豊州島津氏、志布志城を去り、肝付良兼が入城
永禄７年(1564)	肝付兼続、重臣とともに志布志城に入る
	肝付竹友、地頭として志布志に入る
天正元年(1573)	末吉の北郷時久と肝付氏が国合原にて戦い、肝付竹友戦死
天正４年(1576)	志布志地頭肝付兼石、南郷で戦死
	肝付兼護の所領は高山のみとなり志布志などは島津所領になる
天正５年(1577)	志布志に島津氏の初代地頭鎌田政近が入る
天正15年(1587)	豊臣秀吉の日向国城割により松尾城は廃城の対象に(破壊されず)
元和元年(1615)	一国一城令発布　この頃には廃城か

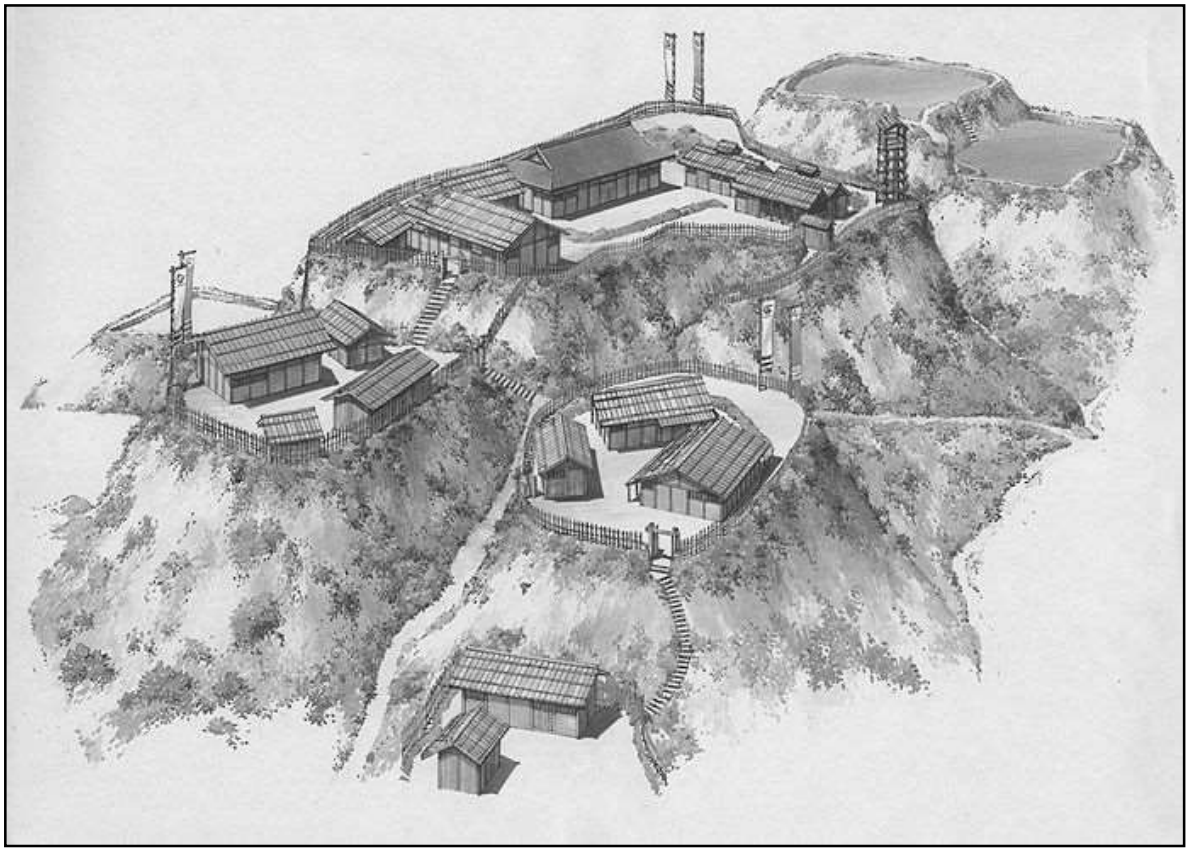
志布志城跡　関連年表

内城跡　地形図




日向国志布志内城縄張図
内城跡縄張図(1／2,500)
0
50m
100m
空堀7
土居i
空堀2
曲輪15上段
大野久尾
曲輪15下段
空堀8
曲輪6上段
大野久尾
曲輪6下段
土居g
上段b
空堀6
曲輪14
上段a
曲輪14
下段a
下段b
空堀6
曲輪13
曲輪12下段
曲輪12上段
空堀1
土居c
曲輪5上段
中野久尾
曲輪5下段
櫓台C
土居e
曲輪4
上段
曲輪4下段
中野久尾
空堀5
空堀1
土塁(土居)b
上段
曲輪11
下段
空堀4
土居d
櫓台b
内城
空堀4
曲輪3上段
曲輪3
下段
空堀3
曲輪2
上段
下段
空堀1
土塁(土居)a
曲輪10上段
曲輪10下段
搦手口b
搦手口a
空堀4
上段
曲輪9
中段
空堀2
下段
曲輪7
上段
曲輪7
下段
空堀2
曲輪8
空堀3
曲輪1
矢倉場
櫓台a
大手口b
館b
館a
大手口a

内城跡　縄張図



内城跡本丸部分　想定復元図

模型と同じく、天正２年(1574 年)に伊東氏の援軍が内城に立寄った頃を想定して描かれた復元図。

左奥の大きな曲輪が曲輪３上段(本丸上段)、その下が３下段(本丸下段)。手前の２つの曲輪が曲輪２上段と下段。右奥に見える建物のない曲輪は曲輪４上段と下段(中野久尾)で、建物は省略されている。

交易をうかがわせる出土遺物

志布志城跡の発掘調査では、国内外の陶磁器類を中心として、土師器や瓦質土器、瓦などが出土し、釘や青銅金具などの金属製品、碁石、砥石、硯などの石製品、ふいごの羽口、坩堝、鉄滓などの製鉄あるいは鋳造に関連する遺物、ガラス製品なども出土している。

内城から出土した陶磁器類、特に青磁・白磁・青花による出土遺物の年代は、14世紀後半～16世紀代を中心としている。確認調査が実施された松尾城跡・高城跡・新城跡の出土遺物に関しても、内城跡との大きな時期差は見られないことから、４城はおおむね同時期に利用されたことが推測される。

１）陶磁器の種類と産地

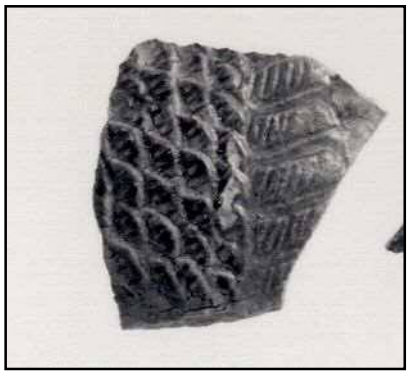
海外磁器：中国～中国南部／青磁、白磁、青花(染付)、赤絵、瑠璃(るり)釉

海外陶器：中国～中国南部、タイ、ベトナム？／華南三彩(かなんさんさい)

国内陶器：備前焼(岡山県)、常滑焼(愛知県) 、瀬戸焼・美濃焼(愛知県)、
唐津焼(佐賀県)、渥美焼(愛知県)、楽焼？(京都府？)

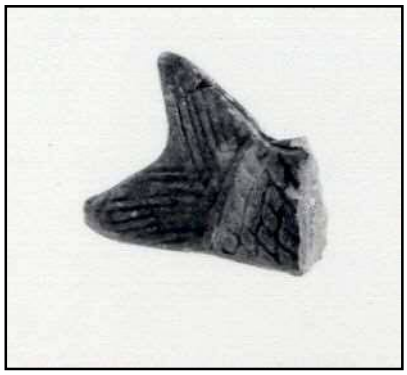
２）華南三彩(かなんさんさい)

華南(かなん)とは、中国南部地域(現在の広東(かんとん)省周辺)を指し、この地域で造られた彩色陶器(さいしょくとうき)(色づけされた陶器)を、華南三彩(かなんさんさい)と呼んでいる。志布志城跡で出土したものは、明(みん)代(1368～1644年)と見られるもので、碗や皿の他、鳥の形をした水差しが２点、魚の形をした水差しと思われるもの１点が確認され、それ以外にも単なる碗や皿とは異なるとみられる破片が数点、確認されている。



鳥形水滴？
(羽の部分)

魚形水滴？
(尾の部分)



鳥形水滴

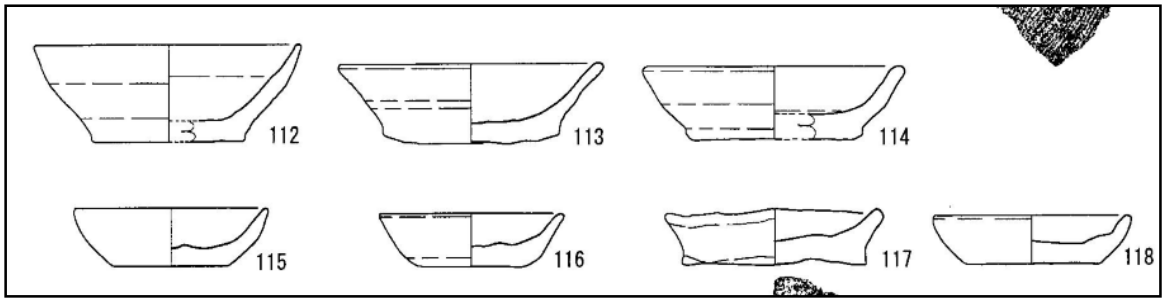
３）京都系土師器

土師器は、弥生土器の延長上にある素焼の土器である。中世山城の時代には、食事用の器には主に木製品や陶磁器が使われ、土師器は儀式などにも使われたと考えられている。

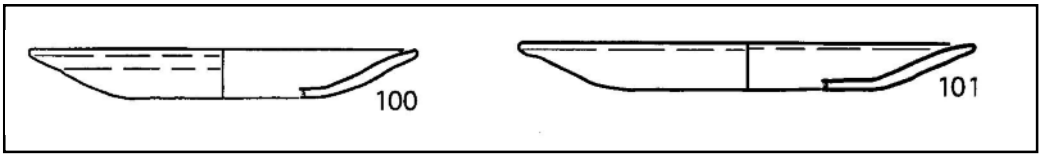
一般的に、南九州の遺跡から出土する土師器は、赤色系の色で「ろくろ」で造られる厚手のものだが、志布志城跡からは、白色系の色をして「ろくろ」を使わず手でこねて造られた薄手のものが出土している。この薄手の土師器は、室町幕府のあった京都周辺で生産され、使用されていた土師器に類似することから、京都系土師器と呼ばれている。

京都系土師器は、京都以外の各地で出土しており、その地方と京都との関係を反映するものと考えられる。発掘調査によって、大友氏（大分市）や大内氏（山口市）などに関係する遺跡から、多くの京都系土師器が確認されている。しかし、これまでのところ鹿児島県下での出土例は少なく、志布志城跡の近隣では都城市でわずかな出土例があるだけである。

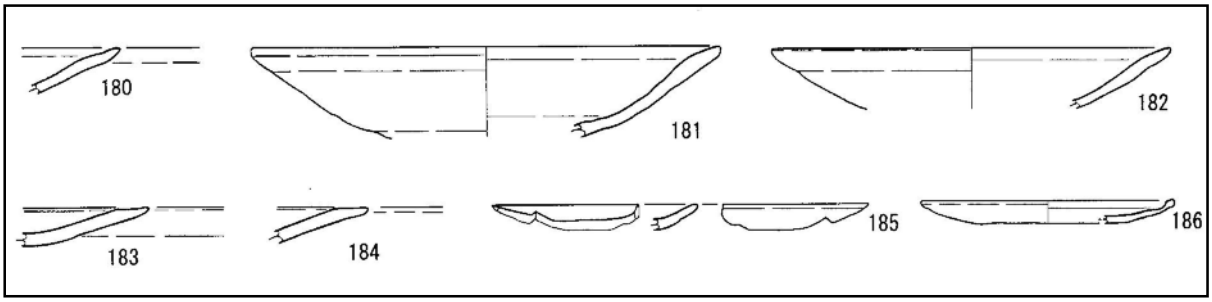
また、志布志城跡からは、京都系土師器に類似するが茶色系で固く焼き締まり、外面を整形調整したような薄手の土師器が出土しており、それ以外にも京都系とは異なる薄手の土師器も出土している。



一般的な土師器（112～118『志布志城跡３』）



京都系土師器（100～101『志布志城跡Ⅱ』）



京都系土師器に類似する土師器(180～184『志布志城跡３』)

京都系以外の薄手の土師器(185～186)

４）銭貨

志布志城跡からは様々な銭貨が出土している。中世遺跡でよく出土する中国(明1368～1644)の洪武通寶(1368年～)や永楽通寶(1408年～)の他、朝鮮(李氏朝鮮1392～1897年)の朝鮮通寶(1425年頃)、琉球(琉球王国1429～1879)の大世通寶(1454年頃)などが確認されている。

朝鮮通寶はハングル文字を制定した第４代国王、世宗の時代に造られた朝鮮独自の貨幣。朝鮮半島での出土は少ないものの、日本での出土例は珍しくない。

大世通寶は琉球の第５代国王、尚泰久王の時代に造られた琉球独自の貨幣。明の永楽通寶をもとにして、尚泰久王の異名である大世主から文字をとったとされている。

大世通寶

朝鮮通寶

中国の銭貨は明代のもの以外に、北宋代(960～1127年)のものが多く出土している。また、江戸期の銭貨である寛永通寶や、加治木で鋳造されたいわゆる加治木銭の洪武通寶も出土している。

東アジアと志布志城の関係年表

西暦		1325	1350	1375	1400	1425	1450	1475	1500	1525	1550	1575	1600
日本（志布志）	時代	鎌倉時代	南北朝時代			室町時代						安土桃山時代	江戸時代
	志布志領主	千種氏 肝付氏	楡井氏 畠山氏	新納氏							豊州家 島津氏	肝付氏	島津氏
			古記録に残る志布志城の時代										
				●蓑原合戦	●犬の馬場合戦					楢ヶ原合戦●		●国合原合戦	
中国	王朝名	元				明							
					●洪武通寶	●永楽通寶			華南三彩の輸出最盛期				
朝鮮	王朝名	高麗				朝鮮（李氏朝鮮）							
						●朝鮮通寶							
琉球	王朝名	三山時代（北山・中山・南山の3国）					琉球（琉球王国）						
							●大世通寶						